

# 「資本論を読む会」便り

2024.12.10 No. 92-93

10月と11月で、次の箇所を読みました。

第Ⅰ部: 第1篇 第1章 第2節 商品に表される労働の二重性 (全部)

第Ⅱ部: 第3篇 第12章 第2節 部分労働者とその道具 (最後まで)

第3節 マニュファクチュアの二つ基本形態 (第4段落まで)

※ 本文・報告・検討事項などの要点を簡単に紹介します。段落は、大月書店の全集版の本文の字下げと傍注の付け方で区切っていますが、原則どおりでないこともあります。

※ 編集人の事情で11月の発行を飛ばし、No.92-93の合併号としました。

## 第93-94回

### 第Ⅰ部 第1篇 第1章 第2節 商品に表される労働の二重性

【第1段落】 労働の二面性の理解が商品の運動を合理的に理解する鍵である。

※ 労働の二面性の理解が重要であることは、マルクスからエンゲルスへの手紙やカウツキーの「資本論解説」でも強調されています。

【第2段落】 リンネル 10エレ (の価値) = W

上着 1着 (の価値) = 2W とする(この節の第12段落以降で扱う)。

【第3段落】 生産物を使用価値にする労働を有用労働と言う。

【第4段落】 二つの生産物が質的に異なる使用価値であることは、それらが交換されるための必要条件である。

異なる使用価値を生産する有用労働は、互いに質的に異なった労働である

【第5段落】 商品生産は社会的分業を前提する。すなわち社会的分業は商品生産が行われるための必要条件である。しかし、十分条件ではない。古代インドの共同体での分業による生産物や、工場内分業での個別生産物の移動は、商品として現れていない。

商品を生産する分業は「自立的な、互いに独立の、私的労働」に基づくものである。

【第6段落】 商品生産者の社会では、独立生産者の私事としてお互いに独立に営まれるいろいろな有用労働の質的な相違が、社会的分業に発展する。

※ つまり、社会的分業は商品生産社会の前提であるが、商品生産は社会的分業を発展させる、ということです。

【第7段落】 労働(有用労働)は、人間の、すべての社会形態から独立した存在条件である。人間の生活を媒介するための、永遠の自然必然性である。

※ これは、人間は労働をせずに、したがっていろいろな使用価値を作らずに、その生活を続けることはできない、という意味です。

※ 芸術などの非物質的生産について、剰余価値学説史第1巻に「生産全体とくらべれば、とるに足りないものであるから、まったく考慮外におくことができる。」とあります。

【第8段落】 使用価値には2つの要素がある。つまり商品体は自然素材と労働の結合物である。

※ 使用価値を生産するには有用労働のほかに、自然素材も必要である、ということです。

【第9段落】 次に、使用対象である限りの商品から商品価値に移る。

【第10段落】 上着とリンネルは、価値としては同じ実体を持ったものであり、同種の労働の客体的表現である。労働の有用的性格を無視した後に労働に残るものは、人間の労働力の支出である。資本主義社会では、同じ(一人の)人間が裁縫をしたり布を織ったりするのである。

人間の労働力の支出は、平均的にだれでも普通の人間が持っている単純な労働力の支出である。

複雑労働は単純な労働の何倍か分と見なされる。というのは、複雑労働による商品も価値として単純労働による商品と等値され、複雑労働による商品の価値も単純労働の一定量を表しているだけになるからである。

ある複雑労働の1日の支出が単純労働何日分になるかは、一つの社会的過程によって生産者の背後で確定される。

※ 価値の実体に関して、労働から有用労働を捨象する事は恣意的ではありません。現実の社会的過程つまり商品交換そのものが、この捨象を行なっているからです。

【第11段落】 価値としての上着やリンネルは、単なる同質の労働が凝固したものである。これらの価値に含まれている労働も、ただ人間の労働力の支出としてのみ認められる。労働生産物は、使用価値はいろいろでも、価値として同質である。

【第12段落】 上着やリンネルは価値一般であるだけでなく、特定の大きさの価値である。価値量の相違は、労働力の支出の量(時間)による。例えば、

1着の上着の価値 = 10エレのリンネルの価値 × 2

となるのは、1着の上着の生産には、10エレのリンネルの生産の2倍の時間がかかることから生じる。

【第13段落】 使用価値との関連で見た労働では、「どのようにして」「何をするか」が問われる。価値の大きさ(価値量)との関連でみた労働では、「どれだけ」が問われる。

一商品の価値の大きさは、その商品に含まれている労働の量だけを表しているのだから、商品は、ある一定の割合をなしていれば、つねに等しい大きさの価値でなければならない。

【第14段落】 有用労働の生産力の変化と価値量 (上着1着の価値量=X労働日とする)

上着1着の生産に必要な生産力が変動しない → 上着1着の価値量=X労働日

上着1着の生産に必要な労働が2倍になる → 上着1着の価値量=2X労働日

上着1着の生産に必要な労働が $\frac{1}{2}$ 倍になる → 上着1着の価値量= $\frac{1}{2}$ X労働日

上着に含まれている有用労働の質の良否は同じ。

上着の生産に支出された労働量は変化。

【第15段落】 生産力の上昇が使用価値総量の生産に必要な労働時間総計を短縮する場合、使用価値量が増大してもその価値量は低下する、ということが起こり得る。

※ 経済恐慌という現象の根底に労働の二面的性格が関係しているので、この段落は後に恐慌を論ずるための伏線とも考えられます。

【第16段落】 すべての労働は、

一面では、生理学的意味での人間労働力の支出であり、この同等な人間労働または抽象的人間労働という属性において、それは商品価値を形成する。

他面では、特殊な、目的を規定された形態での人間労働力の支出であり、この具体的有用労働という属性において、それは使用価値を生産する。

※ レジューメには、『資本論』学習資料室 (<https://blog.goo.ne.jp/sihonron>) から、2009年4月号掲載の労働の二面的性格をまとめた表が引用されていましたが、大変分かり易かったです。

## 第Ⅱ部 第3篇 第12章 分業とマニファクチュア

### 第2節 部分労働者とその道具

【第1段落】 生涯一つの単純作業をする労働者は自身をこの作業の自動的な一面的な器官に転化させ、多種の作業を次々に行う手工業者に比べて作業時間は短くなる。

従って、部分労働によって構成されている全体機構(マニファクチュア)の集団労働者の生産力は、独立手工業と比べ、高くなる。

部分労働が専門機能になると、部分労働の方法も改良される。限られた同じ行為の不断の反復と注意の集中がこれをもたらす。

また、技能の伝達もスムーズになる。異なる世代の労働者たちが常に一緒に、同じマニファクチュアで働いているからである。

【第2段落】 マニファクチュアは細分化された作業をする労働者の熟練を生み出す。というのは、中世の都市で発達した手工業の自然発生的な分化を作業場のなかで再現し、さらに分解・分立させ、極端にまで押し進めるからである。

マニファクチュアが部分労働を一人の人間の終生の職業にしてしまうことは、それ以前の社会で職業が世襲化され、カスト制(インド)や同職組合に骨化されたことに対応する。これらは、最初から最後まで一人の個人が複雑な労働によって生産するという点で、作業の分割や単純化というマニファクチュアにおける分業とは対局にあるが、それらの作業も世代から世代へと伝えられた技を伝承して蓄積されたものだという点で、マニファクチュアにおける細部労働者の技は同じ意味を持つ。

【第3段落】 手工業者がある製品を作る際、一人でいろいろな作業を次々にやって行くために場所を変えたり道具を取り替えたりする。ある作業から別の作業に移るたびに労働の流れを中断させる。つまり彼の労働日の中にはこうした隙間が生じる。

1日中一つの作業を続けて行なう労働においては、こうした隙間は圧縮されるか、作業の転換が少なくなるにつれて無くなっていく。

隙間時間の減少による生産性の上昇は、労働の強度の増大の結果、または、労働力の不生産的消費の減少の結果、によるものである。

こうした利点の半面、同じ仕事の連続は、活気や緊張力や高揚力を失わせる。

【第4段落】 マニファクチュアは手工業であり、労働の生産性は道具の良否にも依存する。分業により、一つの労働過程がさまざまな作業に分離され、それぞれの部分作業は部分労働者の専有の仕事になる。すると各作業専用の道具が工夫され、以前の多目的に使われていた道具に取って代わる。

マニファクチュア時代は、単純な道具の結合から成り立つ機械の使用の物的条件の一つを作り出す。

【第5段落】 マニファクチュアの単純な要素について述べてきた。次節ではマニファクチュアの全体の姿に目を向ける。

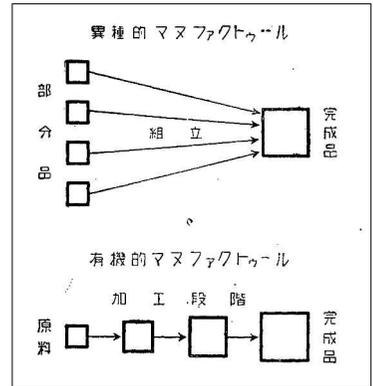
### 第3節 マニファクチュアの二つの基本形態

#### ——異種のマニファクチュアと有機的マニファクチュア

【第1段落】 マニュファクチュアの編制には二つの基本形態がある。ときには絡み合っていることもあるが、本質的に異なる。マニュファクチュアがのちに機械制大工業に転化するときにも、まったく違った役割を演じている。この二重性は製品そのものの性質から生じる。

- ① 独立の部分生産物の単なる機械的な組立てによって完成する製品 → 異種的マニュファクチュア
- ② 相互に関連する一連の生産過程や操作を経過して完成する製品 → 有機的マニュファクチュア

※ マニュファクチュアの二重の起源との関連について、マルクスは何も指摘していないが、その内容から、二つの基本形態は二重の起源と対応しているように見えます。



(越村信三郎「圖解資本論」より)

【第2段落】 異種的マニュファクチュアの例

時計は、部品の殆どが異なる労働により作られ、最後にそれらを一つの機械的な全体に結合する労働によって製品となる。

手工業的職人の個人的製品から、時計マニュファクチュアにおける無数の部分労働者の社会的生産物になった。ここでは、一つの資本の指揮のもとでの部分労働者の直接的協業が行なわれている。

この場合、部分労働は互いに独立した手工業としても営まれ得る。分散的製造の場合には資本家は作業用建物などのための支出を免れるからである。とはいえ、自宅で一人の資本家(製造業者、企業者)のために労働するこれらの細部労働者の地位は、自分自身の顧客のために労働する独立手工業者の地位とはまったく違うものである。

【第3段落】 有機的マニュファクチュアの例

互いに関連のあるいくつもの発展段階、すなわち一連の段階的過程を通る製品を生産する。例えば、縫針マニュファクチュアでは、針金は、72種から92種にも及ぶ独自の部分労働者の手を通る。

【第4段落】 このような有機的マニュファクチュアは、もともと独立していた手工業を結合するので、さまざまな生産段階のあいだの空間を縮小し、生産物がある段階から次の段階に移行する時間を生産物を運搬する労働とともに短縮し、その結果、手工業に比べて生産力が増大する。これはマニュファクチュアの協業的性格から生じる。

他方、マニュファクチュアに特有な分業の原則はいろいろな生産段階の分立化を必然的にする。これらの生産段階はそれだけ多くの手工業的部分労働として互いに独立化される。分立化された機能のあいだの関連を確立し維持するために、製品を絶えず一つの手から別の手に、また一つの過程から別の過程に、運ぶことが必要である。大工業の立場から見ると、マニュファクチュアの原則に内在する、特徴的で費用のかかる局限性である。

※ イギリスの資本主義の発展に毛織物業が大きな役割を果たしたと思うが、マニュファクチュアの例として出てこないのは何故だろうか、という疑問が出されました。確かに第12章では出てきませんが、後の方の章で少し出てくるようです。羊毛マニュファクチュアがどんなものだったのか調べる必要がありそうです。

◎今回は例会2回分の「便り」なので、ほとんど各段落のかなり圧縮した要点だけになってしまいました。重要な点を外してなければ良いのですが…。